



年間第 14 主日 (ルカ 10:1-12,17-20△10:1-9)

平和があるように

「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。」(10・5) 七十二人を派遣するイエスは、収穫のために働き手を送ってくださるようにと願いなさいと命じ、そのあとにこの「平和があるように」と告げなさいと命じます。弟子たちの願う平和とはどのようなもののでしょうか。その平和は、どのようにして与えられるのでしょうか。

聖トマスの霊名の祝いを準備してくださって、本当にありがとうございます。今年はまだ味わったことのない霊名の祝いを迎えました。長崎で頑張っている志願者から、「霊名お祝いカード」が届いたのです。

皆さんからのお祝いが前もって知らされていたお祝いなら、志願者から届いた「お祝いカード」は予想しなかったお祝いの喜びです。田平教会から志願者が出て、こんな嬉しいことが待っていた。神学生・志願者は、故郷の教会にとっても大きな喜びをもたらしてくれるようです。

さて、今週説教の冒頭に取り上げた「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。」この挨拶を、皆さんどこかで聞いたことがないでしょうか？もう思い出した方もおられるでしょう。ミサの中で使われています。

ではミサのどの部分で使われているのでしょうか。二箇所あります。ふだん聞き慣れている箇所が一箇所と、めったに聞かない箇所が一箇所です。ふだん聞き慣れている箇所は、「平和のあいさつ」の部分で、「主の平和がいつもみなさんとともに」という招きです。このあいさつは、日頃ミサにあずかっている人はなじみ深いでしょう。

もう一つの箇所はどうでしょうか。ここを掘り下げてみたいと思いますが、これは司教様が来た時だけ使われる招きです。黙想会の時の酒井司教様も使っていました。もちろん私たちの大司教様もお使いになります。どの部分でしょうか？答えは司教様司式のミサの始めです。「平和がみなさんとともに」と司教様が呼びかけます。思い出したでしょうか？

このあいさつは、司教様が用いるミサの招きのあいさつでして、司祭はこれを使うことはありません。この平和は、単に争いのない状態、穏やかな状態を指すのではなく、「満ち満ちた状態」を指し、「神の救いの到来を示す賜物、神が与える贈り物」なのです。

なぜ司教様がこのあいさつを用いて、通常の司祭は用いないのでしょうか。それは、叙階の恵みの違いにあります。司祭の叙階のあとさらに与えられる司教叙階の恵みは、「叙階の恵みの充満」と言われます。平和が「満ち満ちた状態」であるならば、その平和は真っ先に叙階の恵みが満ち満ちた司教を通して与えられるわけです。

みなさんは、司教様のミサに時々あずかることがあるでしょう。司教様の最初のあいさつ、「平和がみなさんとともに」を、今まで意識し

たことがあるでしょうか。もし意識してなかったとすれば、次回思い出してください。私たちは神が与える賜物である平和を、司教様を通していただいているのです。司教様が「平和がみなさんとともに」とあいさつしているとき、神の救いの到来を見ていることになるのです。

司教様司式のミサにあずかる人は、この並外れた恵みにあずかっています。そしてその恵み深いミサは、これまで高見大司教様お一人でしたが、ありがたいことに補佐司教様が与えられて、より多くの人々が「恵みの満ち満ちた状態」「神の国の到来」「神が与える賜物」にあずかれるようになったのです。補佐司教様の誕生で、「叙階の恵みの充満」により多くの人があずかれるようになるわけです。

堅信式、各種の記念行事ミサなど、大司教様と補佐司教様がそれぞれ分担してミサを司式してくだされれば、これまで以上に長崎教区の教区民は恵みをいただけるようになります。少し耳の痛い話を言うと、今まで司教様が言っていた「平和がみなさんとともに」にまったく気づいていなかった人にとっても、もっと恵み深いミサになることでしょう。

この平和は、司教様を通して神様から与えられるものです。そうであるなら、私たちは神様から与えられる恵みを、司教様や司祭たちを通してより身近に感じることができます。司教様がおいでになると、遠くからしか見ようとしらない人もいるかも知れませんが、恐れ多いと感じるかも知れませんが、司教様への親しみや尊敬の気持ちを、恵みを取り次いでくださるという気持ちで意識することができればいいなと思います。

「平和がみなさんとともに。」今年11月、私たちは教皇様を通して、神の国の到来を告げ知らせる恵み深い言葉を聞くことができるかも知れません。